

母をみるつもりであったのに、みてもらったことになってしまった。

私は、母が亡くなって数年して定年退職したが、五十歳だった。働く長女の子供二人を預かったの孫育てで、張りのある生活だった。主人は、定年後の晴耕雨読を楽しみにしていたが、教育委員会の仕事で自由を楽しむ身にはなかなか出来なかった。

孫育てもやっと終わり、主人も自由の身となり、これからというときに主人の死、一人残されて生きる望みなどあろうはずもない。だが、離れ住む子や孫に励まされ、励まされて、限られた余生を三人の供養のために頑張らねばと思うようになった。

やがて八十四歳になろうとしている今、一番嬉しいことは、子供たちの優しい心遣いである。

「細雪こやみもあらで庭に降る

夫の墓にも、我が心にも」

今朝は雪、雷も暴れていたが、昼過ぎから太陽

がちよっと顔を出したら、ずるずると大きな音を立てて屋根から雪が落ちた。あの富坪の日本人墓地にも雪がちらついているだろうか？

## 苦難の旅路

長野県 小沢 昌子

### 一 旅立ちの日

その日、新潟港では前夜来の牡丹雪が激しく舞っていた。乗船口では多くの人の乗船手続きなどで混み合い、慌ただしくそして急がされながら行き交っていた。この春に国民学校一年生として入学する年齢になっていた私は、両親に手を握られてやつのことで乗り込み、甲板に導かれた。春が待ち遠しい季節に激しい雪降りの日のことは、後年になっても鮮明に脳裏に焼き付いている。

亡くなった両親共、小学校の訓導をしていた

が、その書き残した履歴書によれば、父は昭和十六（一九四一）年三月に、それまで勤務していた長野県上伊那郡伊那小学校から、朝鮮の咸鏡北道会寧公立国民学校に出向させられた。同時に母も、それまで奉職していた上伊那郡の宮田小学校から、父の出向に伴って同じく会寧の公立東国民学校に出向を命ぜられて、一家を挙げて新天地の会寧に夢と希望を持って渡鮮したのであった。

えんじ色をした羅紗地の真新しいオーバーに体を包まれ、大粒になってきた雪を振り払いながら乗船した船は、「満州丸」という船名であった。

その満州丸には満蒙開拓青少年義勇軍の、はつらつとした顔色をして張り切ったきびきびした動作をしている青少年が、甲板にあふれる程乗っていた。

岸壁の建物の屋上にあるスピーカーから流れるのは、「ここはお国を何百里、離れて遠き満州の？」のメロディーであった。会寧に行くこと決まっただけからは、急にこのメロディーに親近感を覚

えてよく口ずさんでいたが、ここ新潟港で、しかも連絡船の上で聞くメロディーは、また格別の印象深いものであった。

船中でどうしていたかはあまり記憶に残っていないが、日本海に出た途端に荒れる海となり、船は前後左右に大揺れして、ほどんどの人が船室で横になったままで過ごしていたことは、かすかに記憶に残っている。私もおとなしくしていたようであった。

上陸した港は清津であったか、あるいは羅津であったか、当時六歳を過ぎたばかりの私には、その記憶はあいまいである。いずれにせよ、無事に朝鮮の地を生まれて初めて踏んだことは確かなことである。

## 二 会寧での出来事

長野の家から送り出した引越荷物は数十梱こむであったが、その中で父が特に慎重な手つきで開梱していたひとつの箱があった。蓋を開けた父が、喜色満面として母と顔を見合わせていた。「一枚

も割れていない！ マルトキのレコードの荷造りは、さすがにすばらしい。丁寧な荷造りは立派なものだ！」と言いながら、子供のように万歳をしていた。マルトキとは、当時長野市にあった有名なレコード店で、現在は時計の専門店になっているが、音楽好きの父は暇があればこの店に足を踏み入れて、好きなレコードを買って求めている。手廻しの蓄音機から流れる数々の名曲、「故郷を離れる歌」とか「浜辺の歌」とか「流浪の民」など、当時の世情の一端を音楽に表現した名曲に、嬉々として耳を傾け、時には母と共に声を出していたくらいだから、送り出した数十梱の引越荷物の中で、一番気に掛かり、そして注意していた一家の宝物扱いのSPレコードが、一枚も割れずに日本海を無事に渡り会寧の家で再会したことは、両親には何よりの喜びであったことだろう。会寧での最初の印象的なことであった。この大事なレコードも、その後どんなことになってしまったのか、両親は口に出すことはなかったが、心の中で

はさぞ悔やんでいたことだろう。

会寧に移ってしばらく経ったころ、母が出産し私に弟ができた。お祝いに来てくれた母が担任をしていたクラスの朝鮮人の女生徒たちが、弟を見て最初に発した言葉が、「コノアカチャンモ、コクゴナラワナクテハナリマセンネ！」であった。当時、朝鮮における植民地化政策のもとでは、朝鮮人の子供は国民学校に入学したときから、日本語を国語として強制的に教えられていた。いわゆる皇民化政策であった。

このとき私は、父の奉職する会寧公立国民学校の一年生であった。美しいチマとチョゴリに身を包んだ朝鮮人の同級生も、みんな創氏改名によって日本名を名乗っていた。西川和子さんとか、泉薫さんとか、今でも名前は思い出すが、顔がどうしても浮かんでこない。改めて日本の植民地政策によって朝鮮の人々に与えた数々の苦汁が、現代の人々の想像を超えたものであったことの一端が、この言葉となったのだらうと思いい出して

る。

昭和十七年三月十日にあったことも忘れられない。ここ会寧では三月はまだまだ冬のさなかで、寒風が肌を刺すような冷たい北風が吹きすさび、身にしみ入るような寒さであったが、父に連れられて会寧の連隊での陸軍記念日のイベント会場に行った。そこは大変なにぎわいで、人混みの中に交じって、ある建物に入るためにその入口の列に加わっていた。そしてその入口まで来たところ、そこには美しい色彩の施された一枚の布が敷かれていた。そして、この建物の中での催し物の会場に入る人々は、男であろうと女であろうと、年寄りだろうが子供だろうが、みんなその布を踏んで入るように仕組まれていた。その美しい布は、アメリカの国旗の星条旗であったので、一瞬私はそこに立ち止まってしまった。日頃から我が家の躰によって、物を踏んではならないことを厳しく言われていた私は、この美しい敷物を踏むことはできずに、それを飛び越そうと考えた。すると父

は、私の心の中を見透かしたように、無言のまま私の右手をしっかりと握り直して、力を加えていた。私は、父がこれを飛び越えることを許してくれたものと思っ、ぴょんと飛び越えた。

それは、戦意をあおり立てるためのひとつのアイデアではあったのだろうが、シンプルな美しさの日章旗とはまったく異なる色彩豊かな星条旗を踏んで会場に入り、「踏み絵」のごとくに踏みつけることはできなかった。国民学校二年生になる私の、父との間に起きた貴重な思い出のひとつである。

会寧公立東国民学校に奉職した母は、赴任した当初から昭和十七年の末ごろまでは、まだ着物に袴をはいて出勤していたが、戦局がだんだんと厳しくなるにつれてモンペ姿に変わっていった。演習などをしている連隊の兵隊さんたちが、学校周辺で小休止をしていたが、その兵隊さんたちが母の姿を見て日本人の女教師であることを知り、懐かしさに声を掛けてきていろいろと話をするよう

になったが、そのうちに休日における外出先を我が家にする数人の兵隊さんがいた。特にその中でも、仙台出身の小山さん、新潟出身の藤井さんの二人は、連隊で勤務する間の外出は会寧市街に出ることは少なく、ほとんど我が家に来るようになっていた。私たち子供は、兵隊さんの持つて来る慰問袋の中の「金平糖」をもらえるので、兵隊さんの来るのが楽しみで待ち遠しかった。二人が見えない日は、何となく寂しさを感じるようになっていた。母が作る家庭料理を特に好み、食卓を共に囲みながら秘蔵のレコードに耳を傾け、門限ぎりぎりまで一刻の時間も惜しんで過ごすようになっていた。

だが、日が経つに従って連隊内の動きも活発になり、いつの間にか私の知らないうちに会寧から去り、住所の記されていない便りが数度届いたのちに、自然と消息が途絶えてしまった。

引き揚げて長野に戻ってからのことだが、仙台市の小山さんから、復員後私たち一家の安否を気

遣った手紙をいただいた。私が、会寧の家で「長野の実家はここです!」と言って地図で説明したことを覚えていて、「長野県伊那町 小田切みつ子様」とだけ書いた母あての手紙が届いたことから、文通が始まり交流が再開した。

当時の内地でのあの混乱期でも、字も番地も書いていない郵便物がよくも配達されたものと、感謝したものだった。新潟市の藤井さんも無事に復員して、新潟市で健在でおられるようで、年賀状のやりとりを今でも続けている。ご兩人とも厳しい軍隊生活の中で、たまさかの休みに重たい軍靴を脱ぎ、巻脚絆を外し畳の上であぐらをかき、日本人同士での食事を楽しみにしたなどの憩いのひとときを過ごしたことは、自由のない軍隊生活の中で大変に楽しく嬉しかったということが、文通のたびに書かれていた。

### 三 雄基に移って

会寧で、教師として二年間を過ごした両親は、昭和十八年四月にやはり威鏡北道の雄基公立松硯

国民学校に転勤を命ぜられて、私たち一家は雄基に移った。その後、三たび両親は転勤し、終戦は灰岩という所で迎えた。だがどうしてか、雄基から灰岩に引越す間の、雄基時代の記憶に穴があいていて、そこから思い出は滑り落ちてしまった。

当時の写真の何枚かが長野の実家に送られていて、それを見ると、住んでいた家の周辺のこととが断片的に思い出せるようにはなったが、それでもどんなことがあったかは、はっきり思い出せない。家は雄基邑事務所の近くの角地にあったこと、満人学校が近くにあったこと、そして夜には波の打ち寄せ、打ち返す音がよく聞こえていたことなどは薄々思い出せたが、それ以外に、例えば通学していた国民学校のこと、どんな道を通っていたのか、また級友にはどんな人がいたのかなど肝心なところの記憶は全く失っている。これも戦争による災禍の一種であるかもしれないが、苛酷な逃避行、収容所での悲惨な生活、そして飢えや

寒さで死んでいく人を何とも思わずに目の当たりに見て過ごしていた潜在的なショックなどから、記憶の薄いところから部分的に喪失をしてしまったのであろう。

だが、雄基での生活は考えてみればまだまだ平穩無事な日常で、お世話になった方で今でも交際をしている方もいて、その方の話の中から、おぼろげながら当時のことをしのぶこともある。現在、福井市に住んでおられる内田様、そして東京の世田谷の大嶋様のお二方が、私たち一家が雄基でどのような生活を送っていたかについての断片を、今でも回想してくださる貴重な方である。また三鷹市の立石照る子様は、私たち一家とほとんど同じ時期に同じく灰岩に移転されたとのことで、灰岩での両親との交際の思い出を聞かされたこともあった。

#### 四 朝鮮での三度目の転校

昭和十八年に、三たび両親の転勤に伴って灰岩に引越した。灰岩では、灰岩公立国民学校に転

校したが、私にとっては朝鮮での学生生活での三回目の転校で、四年生になっていた。灰岩での生活も、慣れないながら数カ月があつという間に過ぎて、夏休みを迎えた。そのころになると、南方における戦争もだんだんと激しさを加えてきて、サイパン島の玉碎、沖繩の失陥など敗色が濃厚となり、日本本土でも都市も農村も所かまわずに連日連夜の空襲で焼け野原となつていたが、幸いにもここ灰岩での生活は大した脅威もなく、いつもと変わらなかつた。それでも食料品の配給制度、衣料品の割当などの消費生活上の制限がじわじわと押し寄せていたが、私たちはそれほど苦しいこととは思つていなかった。

学校では女子組に入れられ、担任の先生は福井県出身の西田先生という女の先生で、物腰の柔らかい方だったことをよく覚えている。校舎は赤レンガ建てで、スチーム暖房も完備していて真冬でも心地よく、教室にいと居眠りをするようだった。冬場は雄基での学校と同じように、校庭がス

ケートリンクに早変わりしていた。

平和な夏休み生活の最中、運命の八月八日を迎えたが、その日も何の心配もなく、翌朝のことなどは夢にも思うことなく眠りについていた。だが、その深夜の眠りは突如として破られ、運命は一転して暗黒の世界に飛び込み、苛酷な日々が訪れた。

時は、昭和二十年八月九日の早朝であつた。突如として、ソ連軍は日ソ不可侵条約を一方的に破つて日本に対し宣戦布告を行い、満ソ国境の多方面からなだれをうって侵攻してきたのだった。

この日から、私たち日本人はもろんのこと朝鮮人の人たちも、着のみ着のまままで避難民となり、朝鮮半島を徒歩で南下する苦難の旅が始まった。夢想だになつたことが、何の心の準備もないままに、事実だけが遠慮会釈も無く流れていった。

灰岩の町を昭和二十年八月九日の未明に追われるようにあとにした日から、昭和二十一年六月に

やっと博多港に上陸するまでのことは、長野伊那郡の父の生家に引き揚げてきて転入した河南小学校の六年生になった私が、綴り方の時間に書いた「苦難の旅」を、五十余年経った今日読み返してみても、子供の作文ではあるがまだ体験が新鮮な時点で書いたものだけに、すっかり失われてしまったと思っていた記憶の断片が、昨日の出来事のごとくによみがえってきたので、そのままをここに記すこととした。

## 五 『苦難の旅』

夜明けの明星に見送られた、私たち隣組の女、子供たちの一行は、一本の縄を頼りにそれを握りしめて歩き出した。明るくなり始めた灰岩の町中では、鶏や犬のなき声が始めたが、私たちにはそれが悲しく、そして寂しく聞こえていた。昭和二十年八月十日、この日こそは我が家をあとにして、南へ南へと先行きの見通しが無い苦難の旅を始めた日であった。

夜が完全に明けて周囲の様子が分かってきた。

四方八方から続々と集まってきた避難民は、長蛇の列をつくって南へ向かって歩いていった。道はだんだんと峠道に差し掛かり上り坂になってきて、歩くのも容易ではなくなった。灰岩町の工場地帯から立ち上る煙突の煙も、彼方へ彼方へと遠ざかっていった。ただ工場の煙が見えるだけで、楽しく学んでいた学校はもろろん、町外れにあった我が家も見えなくなった。私は家の方を見ながら、心の中で「さようなら！ さようなら！」と繰り返し叫んでいた。

峠を下ると小川のほとりに出た。しばらく歩いていると、前の方から「休憩！」という声があった。休憩になれば、昼食の用意をしなければならぬ。隣組毎に固まって炊事を始めた。父は適当な大きさの石を探ってきて、それを並べて釜戸を作った。私たち子供は薪を集めたり、川から水を汲んだりした。こうして初めて野外での食事をしたが、ピクニックに来たような気分となり大変に楽しく、その間だけ避難していることなどは忘れ



てしまった。鍋、釜なども持ち歩いていたので、小さな子供連れの多い私たちの隣組では、大変な負担だった。午後はまだ二里も歩かぬうちに、夏の日は地平線の彼方に沈んでしまい、日はとっぷりと暮れてしまった。小さい弟たちは、「お山で、おねんね!」と言って大喜びではしゃいでいたが、北朝鮮では八月の真夏でも夜になると急に寒気が出てきて、夜露が降り身にしみるような寒さがやってくる。夜半になると、どの家の子供も寒さに耐えられずに、「おうちにかえりたい!」と言いついで泣き始めた。

どの家でもお父さんやお母さんは、自分が着ている物を一枚、一枚と脱いで、子供に着せている。スチーム暖房の通った温かい部屋で寝起きして育てられた子供たちにとっては、「お山で、おねんね!」の楽しい夢はいっぺんに吹き飛び、耐え難い夜となった。

こうして、南へ南へと向かって歩く苦難な旅を続けている間に、母親の背中に背負われたまま死

んでいく子供が出るようになった。それでも歩かざるを得ない私たちは、三度の食事を楽しみにして元気を出して歩き続けていたが、歩く道々には先に行った人たちが作った、黒くすすけた石の釜戸が空しく残されていた。私たちはその釜戸を使って、残り少なくなってきた食糧で炊事をし、そのままあとから来る人たちのために残して、また先へ先へと歩いていた。だが、日を追うに従って食べ物不足が来てきて、それに比例するように体力が急速に弱ってきた。

そうするうちに途中で、私たちのように南へ南へと歩き続ける一団とは反対に、北上する一団に出会うようになった。「我が家に戻るのだ!」と言っていたが、その人たちは朝鮮の人々だった。その人たちによって、「日本は戦争に負けたのだ。戦争は終わった」ということを知らされた。混乱している道中のことで、そのことを知ったのはいつだったのか正確な記憶はないが、のちに母から聞いた話では、八月末か九月に入っていたかもしれ

れないということだった。いずれにせよ日本の敗戦を知ったが、このまま南下するほかに行動はなかった。

北上する朝鮮人の一団の中に、偶然に父の教え子の父兄がいて、「これから先の南下は、極めて危険です。日本人に対して反感を持っている人が多くいる。生きて日本内地の土地を踏むことは非常に難しいでしょう。私たちと一緒に戻りましょう。落ち着くまで先生の一家を守りますから」と、親切な言葉を掛けてくれた。

私は十一歳だったが、灰岩の我が家に帰りたくて、両親の答えるのを期待しながら見つめていた。父は、「みんな、体力も気力も限界だ。このままでは、これからの道中では犠牲者が続出することは目に見えている。彼の好意に甘えようではないか」と、自分の考えをみんなに投げかけた。私もそれを聞いて、内心はほっとしていた。だが、母は強い口調で「一步でも、二歩でも内地に近づくべきだ」と主張した。結局母の意見が通っ

て、私たちは南下を続けることになった。

こうして、通信手段もなく情勢も分からないまま、山道の旅が続けられた。父たち大人の顔は、さえずりに黙々として歩くことが多くなっていた。時々、「さあ！ いよいよあと三十キロメートルばかりで目的地だ！ みんな元気を出して！」と声を掛けていたが、私たちは目的地がどこなのか知る由もなかった。途中で出会う朝鮮人いろいろな様子を尋ねていたが、あまりよい返事はなかったようだった。

あとで知った目的地とは咸鏡南道の興南市で、そこには興南港という港があり、終戦までは内地との航路があったので、そこから私たちを日本に輸送してもらえらるだろうという淡い希望があったようだった。

やがて、磯の香りを含んだ涼しい風が、疲れ切っている私たちを迎えるように吹いてきた。何となく気持ちに安らぎを与えて歩みにも元気が出るようになったころ、今までの険しい山坂の先

に、見渡す限り広い海が見えてきたが、そこはある田舎の小さな船着場だった。みんなは小躍りしながら、その船着場の浜辺に向かった。ちょうど昼食時らしく、朝鮮人の女性たちがトウモロコシやキュウリや粟餅などを頭の上に乗せて売りに来た。長い間の旅路で、すっかり手持ちのお金を使い果たしてしまったので、買い求めることができずに、よだれが出そうになりながらそれを見ているだけだった。すると父は、今まで大事に持っていた腕時計を外して、それを食べ物と交換し、みんなに食べさせてくれた。

じりじりと真夏の太陽の照りつける砂浜で、船が出るのを待ちながら、壊れたボートの陰で、父の腕時計と交換したトウモロコシや粟餅をみんなで食べた。しばらくすると小型の汚い漁船がやってきた。私たちは順番にその船に乗って沖に出た。やがて興南港に船は着いたが、朝鮮人の船頭は私たちをなかなか降ろそうとしてくれない。船頭たちの話している朝鮮語が、気味悪く聞こえ

た。そのときの私の気持ちは、『安寿と厨子王』の物語のようだった。

そのまま数時間くらい経った。やっとのことで船を降りたが、日本内地に輸送するなどというところではなかった。

船から降ろされると、すぐに保安隊による荷物の検査があった。アスファルトの道路上に、リュックサックや風呂敷包みなどに腰掛けて検査の順番を待っていたが、照りつける太陽で汗が流れ落ちるようだった。そのときの私たちの姿を思い出したびに、悔しさがこみあげてくる。

私たちより前に検査を受けて出てきた人の、「小刀などの刃物を取り上げられるよ!」とか「時計は無言を言わずに取られる!」などという言葉に、これから検査を受ける私たちは、慌てて登山ナイフや、炊事用の包丁などをセーターに包み直したり、米袋の中に隠し直したりして検査を受けたが、すべて無駄であった。リュックサックや風呂敷包みは全部ひっくり返されて調べられ

て、何の抵抗もできずになすがままに取り上げられてしまった。

検査が終わると、そのまま避難民収容所に送り込まれた。この収容所は渡澄寮といわれていたが、以前は興南市で働いていた日本人の人々の宿舍だった所で、室内には畳も敷かれていて落ち着いた日本的な部屋で、あまり不自由は感じなく、やっと今までの苦難の旅から解放されて落ち着けるものと、みんな喜び合っていた。

しかし、間もなく私たちはソ連軍の命令ということで、別の収容所に移されることとなった。移動させられた所は、朝鮮人の工員宿舎であったことと、室内は一応オンドルになっていたが部屋の窓は高く、あまり外の明かりがさすこともなく薄暗い部屋だった。ここは興南市でもずっと山手の方で、徳里という所の鍊風寮という名称の建物であった。部屋の壁は全部ねずみ色で、ひと目見ただけでとても陰気な感じだった。それに、すぐ近くには朝鮮人墓地があって、部屋の中から丸

見えなので恐ろしい感じもした。来る日も来る日も、名も知らないような野草を摘んで食べていた。九月も末ごろになると、もう草も木も枯れ始めて、野草を摘むこともできなくなった。

ある晩秋の午後、父と食べ物を採りに峠道を歩き、やっと傷だらけになってるリンゴを一個見付けて、大事に抱えて寮に戻る帰り道で、道端の石に腰を下ろして休んだ。峠道では柏葉が音を立てて舞っていて、眼下近くの朝鮮人の部落からは、夕食の仕度をしているらしく、暖かそうな煙とおいしそうな匂いが漂っていた。

衰えた体からふりしぼるような声を出して、父が言った。「さあ！ もう一度言っごらん！」私は素直にその言葉に従って、いつものように唱え始めた。「小田切昌子おだぎりあつこ。灰岩公立国民学校初等科五年生。血液型O型。本籍地は、長野県上伊那郡河南村大字下山田○番地口号。避難前住所は、朝鮮咸鏡北道阿吾地邑灰岩、人造石油青年訓練所教官住宅。父、青年訓練所教官、小田切憲。母、

灰岩公立国民学校訓導、小田切みつ子」と、よどみなく答えた。父は「よろしい……」と言い、続いて「さあ！ 一人で全部食べなさい」と、リンゴを指さしながら細かい声で私に言った。私はその言葉に何も考えずにリンゴにかぶりついた。

太陽が山の向こう側に沈み辺りが薄暗くなったころ、鍊風寮に帰り着いたが、灯火もない寮は寒気と夕闇に包まれていた。

私たちの苦しい生活には関係なく月日はどんどんと過ぎていって、厳しい寒さがつづり、肌を刺すような冷たい風が吹き荒れるようになった。栄養失調で死亡する人は日に日に増して、毎日のようにこも包みにされた遺体が各部屋から運び出されて、三角山と呼ばれていた共同墓地に埋められていた。あれほどひと部屋に多人数が詰め込まれた部屋も、すっかり空いてしまった部屋が珍しくなくなった。

昭和二十年十二月十八日の未明、父もとうとう墓地に行かなければならない人になってしまっ

た。父は唇だけを必死に動かして、私たち家族に何か語りかけようとしていたが、とうとう声にはならず冷たい眠りについてしまった。

いつもは、一枚の布団を家族みんなで被り、震えながら夜の明けるのを待っていたのだが、この朝は遠くから聞こえる朝鮮人部落の鶏の鳴き声が耳に入っただけでも、何となく恐ろしさで起き上がることができなかった。母は、発疹チフスにかかっていて高熱にうなされ、ぐっすり眠りについていて、父の死を知らなかった。

一番元気だった姉が、母にも父のことを知らさなければと言って母に声を掛けたが、母は目を覚まさなかった。

日が昇ると、いつものごとく当番の人が遺体を運び出した。父の亡骸に、もう一度会いたいと思って、寮の外に飛び出したが、降り積もっている雪の中に足がすっぽりと埋まってしまい、追いかけることはかなわず、私は力無く部屋に戻るしかなかった。

冷たい風と粉雪の吹き舞う、暗い収容所の鍊風寮にも、昭和二十一年の正月がやってきた。久しぶりで少し硬めに炊いた高梁のご飯の香りがわびしく漂う灯の無い部屋で、同室の人々と去年の正月の思い出を語り合いながら、少量の高梁飯を食べたが、それよりほかには何も無かった。

正月からの四カ月余りは、ほとんど食べ物らしい物は口にできなかった。当初、この興南市での避難民は約三万人とも言われていたが、今では半分の約一万五千人ぐらいになったらしいという噂も流れていた。港の方からどこに行く船なのか、時折聞こえる「ほうー」という汽笛の音だけが、寂しさを一層つのらせていた。

長かった冬もやっと過ぎ、待ち遠しかった春になった五月九日、指示によって鍊風寮を退去して、再び南下の旅が始まった。

父をはじめとして、多くの人々が眠る三角山の共同墓地に別れのあいさつをして出発した。この三角山は、今も私の目にぼうっとして見えてく

る。「あの山に、父が、先生が、そしてお友達が眠っているのだ！」と思うと、離れ難い気持ちになつていた。出発の日は、怨念の思いを残して亡くなった人々の魂が別れを惜しむかのように、冷たい雨が降っていた。夕方になつても降り止まないのので野宿ができずに、部落のある所まで歩き続けた。日が暮れて、朝鮮人の家々からは明るい灯がちらちら見えてきたが、泊めてくれるような家は無く、結局以前刑務所であつたという建物に泊まることとなった。格子戸風の暗い小さな窓から、かすかに三角山が見えていたような気がする。

再度の旅は十六日間続いた。鍊風寮に収容されていたときから、「日本に帰り着くためには、まず国境突破をしなければ！」と言われていた「鉄のカーテン」の北緯三十八度線に、ようやくたどり着いた。

そこには、大きな川があつて、人家が二、三十軒固まった部落があつた。見張りはいなかった

が、ソ連軍か朝鮮の保安隊かはよく分からないが、威嚇射撃のような発砲音が響いていた。川の流れや周辺の景色を見ていると、何となく魔物がいるような気持ちになっていた。

三十八度線を越して南側にさえたどり着けば、そこにはアメリカ軍がいて、日本に帰ることも容易だということで、みんなで高いお金を出し合っ  
て部落から舟を出してもらって、その川を渡った。みんなの顔色は青ざめていたのが、川を進むに従って生気を取り戻してきた。

無事に川を渡り、米軍に収容された。そこでひと通り調べられたり、消毒などをされたあと、京城（ソウル）に向かった。

京城では、私たち避難民の世話をする日本人世話会があって、引揚船に乗船するまでの間の世話をしてもらった。やっと三度の食事も食べられるようになった。京城から引揚船に乗る釜山までは、引揚者輸送列車で送ってもらえたし、釜山港では、乗船前にアメリカ兵から体や荷物の消毒を

してもらった。

多少揺れる中を八時間余り船に乗り、やっと博多港が見えてきた。みんなは、やつれ果てた体で日本本土の青々とした陸地に向かって感激の手を振った。私たちを迎えてくれる、婦人会や小学生たちの打ち振る日の丸の小旗や白のハンカチなどが、だんだんと近くに見えるようになってきた。

## 六 婦郷そして転入学

博多港に上陸したのは、昭和二十一年の初夏であった。栄養失調で心身共にやつれ果てた体で、学齢は小学校六年生であった。

しかし前年の八月、朝鮮威鏡北道灰岩公立国民学校五年生在学中の一学期終了で、夏休みになった八月九日の未明から突如として起きた朝鮮半島縦断の逃避行の日々、そして飢餓と酷寒に耐えながら、ソ連兵の暴行におびえての収容所生活、辛うじて生命をとりとめるのに精いっぱい、学業などとはおおよそ無縁な十カ月余りであった。婦郷先は、亡父の生家のある長野県上伊那郡河南村で

あった。すぐに転入学の手続きのために、所在の河南小学校に母に連れられて行った。

校長先生と母との、私の転入学を巡ってのやりとりは、五十有余年が経った今でもつらい記憶として鮮明によみがえってくる。

校長先生は、「外地からの引揚児童は、学業の遅れの期間によって、長期の遅れがある場合は、引揚前の学年に戻って転入するようにしましょう」と言った。それは、一年下のクラスに転入させるということだった。母はしばらく無言でいたが、「戦争の犠牲で母子家庭になっただうえ、小学校卒業がさらに一年遅れるとは。長女である昌子の卒業を待って生活の基盤を考えなくてはと思っ

ているところです。ぜひとも、学齢どおり六年に転入をお願いします」と強く申し入れたが、校長先生は「しかし、一年近く学業を離れたままに六年生では、多分授業についていくのは無理でしょう」と重ねて言った。母はしばらく無言だった。私は心の中で叫び続けていた。「校長先生のおつ

しゃるとおり、六年生ではついていけそうにもない。鉛筆もノートも、もちろん教科書も、この十カ月の間、目にも手にもしたことがなかった」と、不安な気持ちで校長先生と母とのやりとりを聞いていた。そんな私の心の中を見透かしていたかのような口調で、校長先生は言葉を続けた。

「六年生への転入は、一番つらい思いをするのは子供さん自身でしょう。さらには担任教師の負担、他の児童への授業の進度への影響など考えなければならぬ」と、この言葉を聞いた途端に母の表情はみるみる険悪になり、「担任の先生の負担？」と校長先生の言葉を返しながら、「分かりました！ 担任の先生へのご迷惑とのこと。それで一年重複しろとおっしゃいますなら、担任の先生へのご負担、ご迷惑を最小限にすればよろしいのでしょうか。私は、引揚者の身で心身共にやつれています。松本女子師範の卒業、教職の経験十年余り、教師の端くれの一人です。昌子は、担任の先生へのご負担をおかけしないよう、家で私が



学業の遅れを取り戻すことに全力を尽くさせます」と言い切った。

かくして、翌日から連日連夜、貧しい間借りのひと部屋の裸電球の下での、厳しさに耐えながらの特訓の日々が続いた。そんな中、河南村の駐在さんがノートや鉛筆などの学用品を差し入れてくださった、ほのほのとした思いもあった。

引揚げ直後の臨時採用の小学校まで往復約八キロメートル余りを、毎日徒歩で通勤しながら、帰宅後は私を特訓した必死の母の姿を、今は感謝の気持ちで思い出している。引揚げの道中で感染したらしいマラリアの高熱に、しばしば襲われるという健康状態の私に対しても、平熱の日は容赦なく分数の通分の例題などを何問でも提示し、また漢字の読み方や教科書の朗読など、母子で疲労、睡魔に襲われながら励んだ。裸電球の下で向かい合っていた母の声もいつしかかすれて、遂には二人共、うつ伏せになっていた夜もあった。

母の強硬な言動に理解を示してくださった校長

先生のおかげで六年生から出発できたが、十年後の私は、母が教職を定年退職する前に学業を終え、日赤看護婦養護教諭の道に進んだが、母と共に教職員組合などの集まりに出席した折に、母はふと遠くを見つめるような目つきで、「あのとき、一年遅れなくてよかったね……」とつぶやいた。しかし、その後は母の口からも私の口からも「あのとき……」という話題は無く半世紀余りが過ぎていった。

今、西暦二〇〇三年、私の娘は三十九歳であるときの母の年と同じであり、そして孫はあのときの私と同じ小学校五年生である。

北朝鮮、興南の收容所で、風前の灯のような生命であった私と同じ五年生である孫娘はのびのびと成長し、そして自らを鞭打つように私を特訓していた母と同年齢の娘は、平和の貴重さを享受しつつ、日々を過ごしている。

戦争が、いかに空しい行為であるか、平和がいかに尊いものであるかを、身をもって体験した一

人として、この記録を「私の戦争と平和」の断片として、多くの人々に語り伝えたい思いでいっぱいである。そして今ひとつ、中国残留孤児の方々の肉親捜しの叫びを新聞やTVで目の当たりにしたとき、「さあ！ もう一度言っごらん……」と私に命じた「あのとときの父の言葉」の意図していたものが、今更のように理解されて、父の声なき声が私の胸によみがえってくるのである。

さっば、雄基よ！

東京都 大嶋 幸雄

一 子供は親を選べない

私の父、高久三雄は栃木県の農家の次男で、志を立てて十六歳で平安北道で旅人宿経営の知人を頼って朝鮮に渡ったが、そこで大正七（一九一八）年徴兵となり、羅南歩兵第七十六連隊へ入営。同十五年に小沼ヒサと見合い結婚した。

明治三十四（一九〇一）年生まれの母ヒサは、宇都宮女子師範を出て小学校教員をしていたが、行く末の苦勞を知る由もなく渡鮮、新居は営外居住の陸軍官舎で、長女、次いで長男が誕生した。

昭和二（一九二七）年に曹長で除隊しその後雄基に移住。面事務所（村役場）書記から鉱山師に転職し雄基・羅津の開港前後に土地投機で儲け、成金というところまではいかないにしても、生涯で最良の日々を送り、事業家相手の金融業を副業にした。

当時では子だくさんは珍しくなく、上から二歳ずつの差で、昭和元年生まれの正子、次いで昭和、時子、和雄、昭和八年生まれの私こと幸雄、日出雄に末は昭和十二年生まれの安雄と、出来はともかく、七人の子が揃った。父は「まさに昭和のとき、幸いの日は安からん」と、こんな文句をこしらえ得意になっていた。しかし日出雄は、数え年五歳で病死してしまった。

昭和十三年夏、近くで張鼓峰事件が起きた。ソ